

臨摸本における本文転化
—— 書陵部蔵本『遺塵和歌集』の場合 ——

今野 真二

(人文学部人文学科日本・東洋文化コース)

The Transformed Text in a Hand-Written Copy

Shinzi KONNO

Abstract : In Ancient Japanese, if one transcribes a text with the intention of making a complete hand-written copy, it is difficult to make it. Judging from writing, this case is very interesting. Because the change a chinese character for a kana and the change a kana for chinese character and the change kana orthography are problems to know the system of writing. And the personal special quality of the writers or the special quality of the times of the language unconsciously have an effect on the writings. It is important to analyse such phenomena of language. This thesis analyse philologically the change of the text.

キーワード : 臨摸 本文 固有名詞 言語の時代相

臨摸本における本文転化
——書陵部蔵本『遺塵和歌集』の場合——

今野 真 二

(人文学部 日本・東洋文化コース)

現在を遡って過去の日本の言語及び文学作品を分析の対象とする時、そしてそのために半ば必然的に文献資料に対峙した時、その資料が所謂「写本」(註一)であることは少なくない。幸いにして自筆本に恵まれた場合は別にして、多くの語学・文学研究が写本を扱いつつ行われており、そのことがそれらの分析過程に複雑さをもたらしている。ある一つの文学作品における数多の写本は本文批判 (Textkritik) を経ることによって原型 (Archetypus) または稀に原形 (Original form) に連なる一つの系譜の上に定位することになる。その本文批判の方法として校合 (Collation) が行われるが、校合の結果として提示される校異において、漢字と仮名との区別、さらに仮名遣、仮名字母の区別が問題にされることはかならずしも多くはない。それは書写の過程において、漢字表記と仮名表記との交替、仮名遣・仮名字母の交替は枚挙に遑がなく、〈人の呼吸をする如く平常不断に行はれるもの〉(池田亀鑑Ⅱ三六四頁) 故と思われる。校合が、ある〈底本を基準とする異文の摘出〉(同一九九頁) の謂であり、これによって〈各写本に含有されてゐるすべての本文的要素は全部その因数に分解せられる〉(同) べきであるとすれば、前述のごとき、漢字と仮名との区別、仮名遣、仮名字母の区別等は〈本文的要素〉と、ままたまなされていないことになる。確かにこれらのことがらは所謂「本文」には関わらないことが多いいは違いない。〈本文的要素〉であることは承知されていても、所謂「本文」には関わらない故の処置といえようか。そうした処置を支えてい

る「本文」の概念とは、つまり音声に還元された言語こそが真の言語である、という考え方に多少なりとも結びつくものであろう。それは文字を言語に従属させる、あえて言えば表記についての論いを必要としない、西洋流の言語観に結果的には根ざすものといえようか。しかし、此国の現在に至るまでの言語生活をみわたした場合、文字が言語の「記号」として扱われてきた、とはおよそ考えにくい状況がそこにはある。言語分析のモデルは、その言語による言語生活と自然に添うものであることが求められよう。とすれば、文字(表記)に今少し意を用いる「校合」というものが存在してもよいことになる。文学的観点からの「本文」的要素と言語学的観点からの〈本文的要素〉は自ら異なるともいえよう。

ところで書写行為によって産み出される写本の中に臨摸本がある。〈原本の上に薄様の料紙をあて〉(池田亀鑑Ⅰ五九頁)る影写本とともにこの臨摸本は機械的な複製手段の存しない時代にあつて、複製本製作の方途であつた。当然のごとく〈臨摸は普通の転写に比して、本文の純粋性を保持する可能性が大である〉(同九二頁)が、一方〈如何に忠実な臨摸であるにせよ、結局臨摸以上のもではない〉といえる。影写とは異なり、臨摸本においては書写原本は一旦書写者によって読み解かれる。それを原本に則り、再現することになるのであるが、そこに書写者の〈時代的特性〉と〈個人的特性〉(同)が介在しよう。これらをまったく払拭することはおそらく不可能であろう。故に臨摸本において誤謬がみられた場合、また書写原本との異なりが見いだされた場合、それらは書写者の〈時代的特性〉と〈個人的特性〉に帰するものと考えることがまずできよう。そして言語学的な観点からそれらを分析することによって何ほどかのことがらを語らせることができるもののである。

一 資料について

公卿伝来の文庫として近衛家陽明文庫と並び称せられる秘庫である冷泉

家時雨亭文庫が公開され、秘籍の数々が『冷泉家時雨亭叢書』（以下「叢書」として刊行され始めたことはまさにありがたいことであり、それらに基づく文学研究も活発に行われている。「叢書」第一期第一巻（藤原俊成筆）『古来風林抄』に附載の「月報一」（山本信吉「冷泉家本の概観」）では冷泉家時雨亭文庫の特色が述べられているが、国語学的資料としての価値もまた計り知れない。ところで、今般この冷泉家時雨亭文庫の諸本が公開されるまでは、宮内庁書陵部に蔵されている写本が拠るべき本文とされていた文学作品が少なくない。それは既刊「叢書」の各巻の解題を一読すればすぐに知られることであり、冷泉家時雨亭文庫蔵本を（忠実に模写した伝本に、宮内庁書陵部蔵本が知られる）（巻七『平安中世私撰集』所収『遺塵和歌集』についての赤瀬信吾解題二九頁）や（宮内庁書陵部蔵本は、この時雨亭文庫蔵本を親本とする極めて忠実な転写本であり）（巻六『統後撰和歌集 為家歌学』所収『統後撰和歌集』についての佐藤恒雄解題六頁）といった表現が数多くみられる。もちろん書陵部以外にも冷泉家時雨亭文庫蔵本の転写本が蔵されていることも少なくなく、それは当該文庫本が各時代において重要視されてきたことを物語るが、ここでは叙上の関係にあると目されている当該文庫本と宮内庁書陵部蔵本とを表記にも目を配りつつ、校合することによって幾つかの問題を提示したいと思う。具体的には『遺塵和歌集』を一つの事例として採り上げることにする。

冷泉家時雨亭文庫蔵『遺塵和歌集』（註2）（以下冷泉家本）は前引の解題（二十九頁）によれば（成立からほど遠くない鎌倉時代末期ころの写本だが、奥書などはなく、書写者も未詳）とされている。一方（宮内庁書陵部蔵本は、冷泉家時雨亭文庫蔵本の改行や丁移りまた文字づかいなどともちろん、造本の形態までも模したもので）（同解題）あるという。ここでは造本の形態については措くが、これらのことがらが、書陵部蔵本『遺塵和歌集』（以下単に書陵部蔵本）を冷泉家本の「複製本」たらしめようとの意志のもとに同本が書写されていることを示すものであることは疑いなし

い。書陵部蔵本は、和歌、学問を好み、歌書、物語類の蒐集にもつとめられたことで知られる霊元天皇（一六五四―一七三二）の下で書写されたと考えられており、その書写時期も藤本孝一（註3）によって貞享二―三（一六八五―一七〇）年頃と指摘されている。そうした見当により、以下冷泉家本と書陵部蔵本とをならべてみることにするが、それはつまり中世期写本と近世期写本との比較ということにもなるのである。

はじめに確認しておきたいのは、書陵部蔵本が冷泉家本を可能な限り完全に模すことを意図している模写本であるということである。そもそもうした模写本が何故作られたか、という理由も、原本そのものの尊重、原本の手跡の尊重等、種々原因が予想されはする。また一方に表記面に大幅な改変を加え、所謂「本文」のみを「写す」場合も少なからずあり、書写原本の何を（ひき）「うつす」のかは場合場合によって異なる。しかし、模写本というものが明らかに存在しているという事実は、やはり表記がつねに言語に従属しているのではない、ということを示しているのではなからうか。ところで書陵部蔵本のそうしたつよい志向は、すでに指摘されているごとく、〈時雨亭文庫蔵本の本文ばかりでなく、歌に付された記号までも忠実に模写しようと試みている〉（解題三十頁）ことにもあらわれている。もっとも、冷泉家本に存する（角筆の斜線や合点と、紙の折目と）は転写されていないことが同解題によって指摘されているので、この角筆は写本がうつし得なかった（またはうつさなかった）ことがらに属することになる。また冷泉家本、書陵部蔵本を並べて少しく比較を行えば明らかであるが、書陵部蔵本は冷泉家本を（影写ではなく）臨摸していると思われる。両本の個々の字形は酷似するが、書陵部蔵本には書陵部蔵本なりの筆勢と筆づかいとが窺われるからである。また、これも全巻を並べて通読すれば看取されることがあるが、書陵部蔵本の書き手はこうした書写に熟達した人物であることがわかる。書陵部蔵本は前引解題にあるごとく、基本的には冷泉家本の「極めて忠実な転写本」であるのだが、こうした臨摸

本にままみられる、字形のみを真似た、つまり当該字形がいかなる字体に属するかを認識せずにその字形のみを写し、結果としてその字が判読不能に陥るといった箇所がただの一箇所もみられないのである。書陵部蔵本の書き手は冷泉家本の個々の字形をすべて判読し、かつその字体に対して冷泉家本が用いている筆致により、うつしたと思われる。(註4) ある字形を判読し、それを字体に還元すれば、その書記に際して自らの書き癖が多少なりとも顔をのぞかせることはむしろ当然でもあろうが、そうした点はほとんど見出しがたい。臨摸本であればそれは当然だとももちろんいえず、あえて書陵部蔵本の書き手の技術的なことがらにとどまらない、総合的な意味合いにおいての「技量」を指摘しておきたいのである。ところで今「ほとんど見出しがたい」と述べたが、そうした書陵部蔵本の書き手なりの筆使いがあるにはある。ことが微に入りすぎることを充分に承知したうえで、その幾つかの場合を示せば、冷泉家本「この人」のなかれも／とのしつくりなおちこち(三才四)の「み」(註5)は冷泉家本の中でも特徴的な直線的な書き方をしているが、書陵部蔵本はこの箇所で行名の仮名字体にかき一般的な「み」を使用する。ただしこれは仮名序の部分でもあり、書陵部蔵本の書き手にまだ十全な「調子」が生じていない可能性もある。(註6) また冷泉家本「る」の字体の中で「留」を字母とするものに、現行の仮名にかきい字形をもつものと、漢字にかきい字形をもつものとの二種がみられる。後者は冷泉家本において末画が囲みの外にでたかたちをとるが、書陵部蔵本の書き手は囲みの中で止める。また冷泉家本「よひのまはき」つるものか月影の／ふけしつまるるをしかのこ(二十九ウハ・八十九番歌)の「こ」は合字のかたちをとるが、書陵部蔵本は合字ではなく、「こ」の第二画を書く。このように字母を等しくするものの字形に少異がみられる例、また漢字のくずし方に若干の差がある例はみられないことはない。しかし、ことをこままでいわば「深い」レベルに及ばせてもそれは指摘しようとするればできる、という程度なのである。稿

者は近時異体仮名レベルの用字法、すなわち「仮名字遣」(註7)に關して幾つかの報告を公表してきた。そうした「仮名字遣」の考察が、つねに「機能」に裏打ちされていなければならないことは言うまでもないが、ともすれば表面的な字のかたちにとらわれがちなこともまた事実である。例えば、等しく「奈」を字母としていても、現行仮名にかきい「な」、回転した末画を左側から右側に運ぶ、そして往々にしてその途中で筆が離れ、左右に点のごときかたちをとる(奈a)、回転した末画を右側もしくは下方に運ぶ(奈b)と、視覚的には三種のかたちの観察が可能である。稿者も拙稿(一九九四)においては、この中二種を区別したが、先行する諸論考の中にこれらを区別するものがみられる(註8)。しかるに書陵部蔵本の書き手は冷泉家本の(奈b)を(奈a)で少なからず写している。したがって書陵部蔵本の書き手にとってこの(奈a)と(奈b)との視覚上の差異は問題にすべきものではなかったと考えられる。もちろんこれら三種が仮名字遣としての「機能」を担っている文献の存在の可能性までも否定するものではないが、少なくとも書陵部蔵本の書き手には問題にされていない、つまり問題にしないこともあるのだということは知っておいてよいことがらであろう。書陵部蔵本の臨摸にかける強い意志は、写したことを写さなかったこと、その両面において近世期の表記またその他のことがらを教えてくれる。

書陵部蔵本の書き手の書写における技量、並びに複製本製作にかける意志のつよさを確認したうえで、なお仮名字母の交替が指摘しうる。すなわち、a「一聲ハあやなくすきぬほとくす／なくやいかにと人にとふまに」(十九オ二・五〇)の「き」は書陵部蔵本で(支)、b「弘安のはしめ近衛関白家のわか君うけ／給たりしころかくうけたまはり／たりける」(六十八オ三)の「り」は書陵部蔵本で(梨)、c「なみたのみまつこのもとにさきたちて／なきおもかけそある心ちせし」(七十四オ・二六一)の「へ

見」は書陵部藏本で〈ミ〉、d「……神かきの いもせの中を いましむる……」(七十七ウ六・二七二)の〈世〉は書陵部藏本で〈せ〉とされる。dは同一字母であるが〈世〉は現行仮名〈せ〉と異なった、「を」にちかい字形をもつものをさす。冷泉家本では仮名「せ」に対して〈世〉が四十九例、〈せ〉が五十八例、〈勢〉が七例みられるが、此箇所以外は書陵部藏本はその別に從つて写しているのである。これらは、書陵部藏本の書き手が常用する仮名字体が顔をのぞかせたもの、と考えることがもともと自然であらうが、bは〈梨〉が必ずしも諸文献で頻用される仮名字体ではないこと、また使用位置が行末であることが興味深い。書陵部藏本の書き手の「技量」に結びつく、とは考えられないか。これらの例は仮名字母の交替であり、通常の校合では問題にされない。

二 「本文」の異同

次に所謂「本文」の異同に関わる箇所を挙げる。「文永十年二月後さかの院の大祓へて、人のしやうそくいろ／＼にはなやかなりしに」(六十七ウ一)の箇所「はて、」の重点を書陵部藏本は脱する。行末に位置する重点故の事故と考えられる。一般に改行、改丁に際して書写の事故が多いことは言うまでもない。

『遺塵和歌集』は鎌倉時代後半の高階家一門の詠を集めた私撰集で春夏秋冬恋雑の六巻から成り、総歌数二百七十四首、紙数にして八十一丁の小歌集であるが、末尾に長歌二首とその反歌一首を載せる。この高階家は本歌集の仮名序に「すゑのつゆ／わつかにおとろかしたにのこれるハた、／在原の中將のミならし」(三オ)とみえるごとく、六歌仙の一人である在原業平の「すゑ」であるという意識を有し、「この哥ともを」かきあつめて遺塵和歌集となつてかの中將の古墓在原寺にして披講せしめむ」(四オ)とあるように、業平との関係を積極的に示す。ところで最末尾に位置する長歌(二七四)は「弘安のころあつまへまかりて侍ける／にみちのは

との宿／＼をよみつゝけ／けるなかうた」との詞書きをもち関東下向の際に途次の歌枕を詠み込んだものであるが、此長歌は「たひころも みやこをたてハ」から始まり、「相坂の」関のと」から出発し、「打出の／ふなわたり」「ひらの山」「せた」「野ちのしの原」「もる山」「かゝみの山」「老その杜」と歌枕を点綴するが、長歌全体が「東下り」を主題にし、かつ「伊勢物語」第九段を明らかにふまえた箇所を含むことは高階家と業平との「関係」とを考え併せた場合興味深い。此長歌は八十五前後の歌枕や地名を詠み込むが、終着地は「こいそ大いそ／さかみかは かたせこしこへ」で明らかになように相模国鎌倉であり、鎌倉時代中期以降みられる、新興都市鎌倉への紀行という一つの文学的な流れに添うものと思われる。(註9)そして前述のごとく、それらの歌枕や地名に朱筆(五十九箇所)と角筆(十七箇所)とで合点が施されている。この長歌中において、書陵部藏本の書き手に他の箇所では見られない字形の誤認と覚しきものが集中してみられる。まず「すのまたくろた 門なみに たつるおりとの／いゑ／に」ふけるかやつ の あつたとて 宮ゐひさしき／神かきに」の箇所、並べられた歌枕から「かやつ」は『六百番歌合』恋部下において「寄傀儡恋」の歌題の下に「あづまぢやかやつのはらのあさつゆにおきわかるらんそではものかは」とみえる「萱津原」(尾張)と判断するが、これを書陵部藏本はおそらく「かやへ」と認めている。また「みやちあかさか わたうつの そハなる本野／いと／をし」の箇所「わたうつ」は『和名類從抄』参河國寶飯(ほお)(後に「寶飯」と誤記が定着)郡の条にみえる「度津[和多／無都]」と考えられるが、これを書陵部藏本の書き手は「わたうへ」と判断して書記したと思われる。(註10) さらに「河をへたつる 松はらの濱名につゝく／はしもとは まためにとまる やとなれや」の「松はら」は微妙な字形ではあるが、「浜名」と「松原」とを結びつけた文学的表現は少なくなく、(註11)やはり「松はら」が穩当であらうが、書陵部藏本の書き手は「松はし」とする。歌枕を点綴した此長歌に書陵部藏本の誤写

といえそうな例が集中——といっても三例であるが——している理由の一つはその地名の点綴ということがらそのものにある。長歌を貫く歌意はそれはそれであるとして、各句における、また各句を展開させる妙味はやはり歌枕を詠み込むことに尽きる。飛躍と展開とを眼目とすれば、そこには静かにながれる歌意などというものがむしろ見出しがたいのも当然で、いわば文脈による支援があまり期待できないことになる。そうした箇所において残念ながら書陵部蔵本の書き手の存知の外なる歌枕、地名の書写に關して上手の手から水が漏れたということであろう。これらの例は書写に際して本文転化が生じる一つのかたちと言えよう。臨摸といえども言語の裏付けなくはあり得ないことは言うまでもない。(註6)

また「わたうつ」誤認にはそのかなづかいが關わったと憶測する。本稿では冷泉家本を国語資料として位置づけることを直接の目的とはしていないが、書陵部蔵本を引き合ひにすることによって結局はそうしたことがらも含むことになる。前述したごとく『遺塵和歌集』成立と冷泉家本書写との間にはそれほど時間的な隔たりがあったとは考えられておらず、書写が鎌倉時代末期頃とされている。この時期にはすでに連母音[ue]/[o:]「え」も長音化していたと推定されている。当時長音化していたと考えられる語(ただしオ段音にホ・ヲが後続する語はひとまず措く)を冷泉家本がいかなるかなづかいで表記しているかについて着目してみる。今字音語と問題にする地名とを除くと、八十二例中七十七例までが長音部分を「ふ」表記する。これは、安田章(一九九四)で指摘され、また拙稿(一九九四)でもふれたが、例えば「下にかくふ」(『和歌大綱』)、また『仮名遣近道』にみられる「はしのへを書事」——ここに一括されるのはいうまでもなく動詞の例であり、「へを書事」といっても結局は終止形を中心にして挙例されることになり、これはそのまま「ふを書事」の挙例をまかねる——の条下にみえる「ふひへ此三つにかよふ」(四段活用動詞)場合、「ふひへののひの字を除字」(下二段活用動詞)の場合、そして「ひふへにかよは

ねともふのかな也」として掲げられる名詞類(ただし「あふく」を含む)といった、「へよみフ」という〈暗黙の了解——伏流する原則〉(安田章一九九四)が冷泉家本の「ふ」表記には見事にはたらいっているとみるべきであろう。ここでは冷泉家本の書き手の「技量」を確認することになる。へよみフ こゑウ はそれはそれで均整のとれた原則であるが、ことを和歌世界ということに少しく絞った場合、そしてその世界でのかなづかいを考える場合、「へよみ」と「こゑ」とは同じ重さをもってそこに存在するのではない。「こゑ」の仮名表記には相応の「場」と「動機」とが必要であることは明らかで和歌世界となればやはりそこは「へよみ」の世界なのである。そうした限定をつけた場合には、まず挙げるべき「原則」は「へよみフ」であり、「非へよみ」に対して「ウ」があったと考えることができよう。そうした観点から以下の考えを進める。その原則下にあつてなお「ふ」ではなく「う」で表記されたのは、「まうつ(詣)」(四〇四・十七オ一)と「つかうまつる」(九〇六・十二ウ四)「まてのこうちとの」(七十三ウ五)の三語五例である。これら三語がこのまま古典かなづかいに合致すること、また和歌の詞書きにはみられても直接和歌に詠み込まれるような語ではないこと、『假名文字遣』に挙例されていないことは興味深いがそれについては今は措く。ここでは「ふ」表記が大勢を占めることが確認できればよいのである。そこで歌枕・地名を詠み込んだ当該長歌に目を移すと、ここに「かまう(蒲生)」「わたうつ」「をうわた(大和田)」「さかう(酒匂)」と四例、長音を「う」表記したと覚しき例が並ぶ。ここで一々の地名について当期長音化していたことの証が必要ではあるが、今その手続きを省く。これらは地名故、そもそもかなづかいということがらの埒外であったことが想像される。またたとえ地名であっても平安期以来の歌枕であり、和歌に繰り返し詠み込まれてきた地名であればそこには落ち着くべき「かたち」があるうが、この四例には「蒲生(野)」を除いてはそうした「実績」はなかった、と思われる。それが「う」表記が集中してみられる理由

の一つであろう。また「わたうつ」は前掲のごとく『和名類從抄』には

「和多無津」とあり、第三拍撥音化していた時期もあるいはあったかと思われるが中世期に長音化したものと考えられる(註三)が、それをかな表記する場合、いかなるかなを用いるべきかについて落ち着くべき「かたち」があるはずもない。「酒匂」についても同様のことがいえよう。それ故、「よみフ」ではないかたちで長音を表記するいま一つの表記「う」を配したと考えたいのである。こうしたことがらも冷泉家本の書き手の技量を物語っている。またこれらの四つの地名に関して、書記者には漢字表記の裏付けがなかったことも予想される。すなわち当該長歌をみわたすと、和歌の表記の常として漢字を交えないにしても、「相坂」「打出」「小野」「濱名」「池田」「山口」「嶋田」「原中」と漢字表記もみえ、漢字仮名の交ぜ書きも少なからずみえるからである。今、ここで仮名表記されている歌枕・地名すべてにわたって書記者の脳裏にしかるべき漢字表記がなかったというものではない。むしろしかるべき漢字表記が存在するからこそ「安心して」仮名表記が適用というものである。これら四地名(あるいは「蒲生」を除いた三地名)に関してみられる長音表記の「変調」(それは非和語風である)がそれを示唆してはいないか、ということである。特に「をうわた」はそうした可能性を強く感じる。つまり「をうわた」が背景に「大和田」なる漢字表記を伴っていれば、「おほとの(大殿)」(四十三オ五)「おほかた」(六十三オ五)「おはや(大屋・参河)」(八十オ三)のごとくこは「おほわた」とあったと予測する。「お」に配置させるにこの語頭での「を」は多分に表音的なきざりを感じさせる。書陵部蔵本の書き手は「かやつ」を「かやへ」としたのであるから、「わたうつ」を「わたうへ」としたことの背景には冷泉家本の「つ」字体が「つ」とも「へ」とも判断しうるといふことがあろう。しかし、それは冷泉家本の筆致に限ったことではなく、それをしかるべき語に還元することがすなわち「技量」であるはずで、やはり書陵部蔵本の書き手を誤認に導いたのは地

名とその表記と考えられる。(註四)

三 言語の時代相

例えば日本語の流れを古代語と近代語と、区分して考えた場合、種々の観点から前者後者に異なりが認められるからこそここに一つの区分線が引かれるのであるが、ことを本稿の主題に即して言えば、『遺塵和歌集』の成立及び冷泉家本の書写年時が前者の時期にあり、後者の時期に書陵部蔵本が書写されたことになり、様々な近代語の影響を書陵部蔵本が被ることは理論的かつ常識的に想像される。しかし言語の学においては、理論的にはそうであろう、あるいはそうなるであろうことと、実際に、確かにそうであったことの間にはなお一線を画すべきではなからうか。その意味でこうしたことがらについても今少し言語の具体相に基づいた記述の蓄積が必要であると考ええる。そうした言語の時代相に関わると覚しき例を取り上げることにする。

冷泉家本の「ぬしなくてさらすにしきやつゆ霜に／ぬれてハひぬるもみちなるらむ」(三十三ウ・一〇四)を書陵部蔵本は「もみちなるらん」とする。『遺塵和歌集』仮名序には「正安ふたつのとしう月なかはのころかきしるせる」とあるが、この正安二(一二三〇〇)年頃が成立時期と目されている。とすれば歌集成立時にはすでに助動詞「らむ」の語末音は撥音化していたことになる。冷泉家本は成立からほど遠くない鎌倉時代末期ころの写本(解題)と目されており、撥音表記に関して冷泉家本が書写原本から特別隔たった表記をとることはあまり考える必要がなからう。今、冷泉家本の助詞・助動詞を例としてその撥音表記の傾向を窺うと、助動詞「む」において四十四例中三十四例、助動詞「らむ」において五十三例中三十八例、助動詞「けむ」では二例中一例、終助詞「なむ」では三例すべて、係助詞「なむ」(すべて和歌以外)では四例すべてが「ん」表記されており、これらを合計すれば、一〇六例中八〇例(七五・五%)が「ん」

表記されており、当該本における「ん」表記への傾きが明らかである。この「ん」表記への傾きは時代が下るに従って顕著になっていくことは言うまでもない。仮に書陵部蔵本が臨摸本でなかったとすれば、撥音表記の大半が「ん」表記されていてもむしろ当然と言うべきであろう。その意味からすれば数量的には書陵部蔵本は冷泉家本の「ん」表記を僅か一例増やしたにすぎないが、繰り返し述べきったように、書陵部蔵本の臨摸への意志、また書き手の技量をもってなお、「らむ」を「らん」とした背景には、書陵部蔵本が書写されたと目されている十七世紀十八世紀初頭の撥音表記のありかたが窺われるのである。

次のことがらはさらに興味深い。冷泉家本の「しハしとていなはの山のみねはこそ／わかれにたえてなからへもすれ」(六十八ウ・二三八)を書陵部蔵本は「しハしとていなはの山のみねはこそ／わかれにたえてなからへもする」と写す。さらにもう一箇所、末尾の長歌中の「ふしかハのそこみえさりし／はやこそ おもひいつるも たゝならね」(八十一オ)を書陵部蔵本は「たゝならぬ」とする。後者には冷泉家本「ね」字体と「ぬ」字体との近似という要素を加味する必要がある。これが事実であるが、何故こうしたことが起こったか、についての「解釈」は書陵部蔵本の書き手の「技量」の程度によってわかれよう。ここまで書陵部蔵本の書き手の「技量」を再三にわたって指摘してきたのであるから、「そのころもおもひきやとはわりやらん」(寛文十三年刊本『歌道秘蔵録』という「大事の口傳」なる規範の埒外にあったという予想は論外のものである。しかしロドリゲスが『日本(大)文典』「書きことばの活用」において「もけり、ぞける、こそけれ」を「文が如何にしてけり、ける、けれに終るかといふ事を知るための一般法則」(土井忠生訳 一六三頁)として掲げたことは、すでにロドリゲスの観察した日本語において「口頭語はもとより、書きことばでも、コソの結びの守られ難かったと見る」(安田章 一九八〇)べきであろう。此時期、つまり室町期から次期(近世初期)にかけて、

係助詞「こそ」をめぐる表現において相当な変質が進行しつつあったことはすでに安田章(一九八四)に詳しい。稿者もその驥尾に付して室町期連歌における例を付け加えたことがある。(拙稿一九九〇)(註五)したがって書陵部蔵本が書写された時期において、係助詞「こそ」の文末拘束力が限りなく弱化していた故、こうした誤写が生じた、と考えることは、それは筋でありもとよりそうした考え方が成立しないなどと言うつもりはまったくないが、「こそ」のてにをはとゝのはざる歌」(『詞の玉緒 五之巻』)が少なからず存在し、「かゝへのかなをさへのかな」(『春樹頭秘増抄』)という、いわば呼応を命脈とする係結びの関係が「こそ」なし已然形終止や「こそ」連体形・終止形終止という韻文に曲調を与える新しい「かたち」によって変質していたことが、それらの「かたち」をあえて「とゝのはざる歌」として咎めだてることを促さなかったとも考えられるのである。宣長は少なくとも『詞の玉緒』においては日本語の法則そのものに目を向けていたからこそ、そうした例をその立場において採り上げたのであって、もしこれが自らも作者として当期の韻文に慣れ親しんだものであれば事情はどうか。「とゝのはざる」とは語法からの謂いであって、已然形をめぐってそうした「とゝのはざる」韻文が室町時代から徐々に増えつつあったことを考え併せれば、これを韻文の文法と称することが強弁に過ぎるとしても、韻文の表現法として位置づけることはむしろ当然のことと思われる。書陵部蔵本の書き手はそうした「表現」に慣れていた人物と考えたいのである。しかしながら、冷泉家本の臨摸がそもその目的であれば、これら二例はやはり「失」であるに違いなく、またいづれにしても「書写時」へ近世における已然形終止に干渉されている」(安田章 一九八四)実際の例になるのである。

踊字の〈起筆位置と時代との関係〉については片仮名資料に関して小林芳規(一九六七)によって詳細な分析がなされている。同論文では平仮名資料が〈物語・和歌等の和文学作品では転写を一再ならず経たものが大部

分である故、分析に〈困難が多い〉ことを述べたうえで、〈二字踊字の起筆位置の変遷は、片仮名の場合と一面ではほぼ同様な推移を辿ったと考えられる。しかし小異の面もあったらしい〉という。さらに青谿書屋本『土左日記』を採り上げ、その〈二字踊字の形態〉に〈起筆位置が下端である形態〉が多く、さらに〈起筆位置が下字から離れてしまった形態も散見する〉ことを指摘し、それが〈為家の転写本を近世に再転写した経過〉を反映したものと述べる。同様のことがらが今回の調査においても看取される。すなわち『遺塵和歌集』には二字の踊字が十九例存する。冷泉家本はこれらを下字の右傍真中ないしは下寄りから起筆する。(小林芳規によって鎌倉時代中後期とされる形態)すなわち「たえ／＼」(八ウ七)「いろ／＼」(六十七ウ二)のごとく下字を書き終えてから明らかに筆を上方に運んで踊字を書記する場合と、下字の末画の、気持ちとしては上方から踊字を起筆させる場合とがあり、後者が大勢を占める。〈時と共に漸次起筆位置が下降して行った〉とすれば、冷泉家本の二字踊字の起筆位置は鎌倉中後期のどちらかといえば後期の状態を表していることになり、前引した書写年時の推定と符合する。書陵部蔵本も臨摸本故、その書写年時からすれば、たかい位置から二字踊字を起筆する例が少なくないが、下字の末画よりも明らかに低い位置から起筆する例、すなわち「いよ／＼」(三オ七)「よな／＼」(五十二オ四)「いろ／＼」(六十七ウ二)「とき／＼」(七十七ウ八)「ひき／＼」(七十七オ五)「なか／＼」(八十ウ四)を少なくとも含むこと、またそうした例が集の後半に比較的集中して存在することは注目すべきであろう。しかしこのようないわば「本文」に関わらないこととがらにおいても、書陵部蔵本がなおすべて下字の末画より低い位置から書いていないところに、書陵部蔵本の作成された「臨摸」という行為に注がれた意志を感じざるを得ない。と同時に、ここまで述べきたったごときことがらを「本文」に関わらない、として等閑視することがはたして可能なのかということを改めて考える必要を訴えている、とも思える。

のである。

本稿では冷泉家本『遺塵和歌集』と書陵部蔵本のそれとの比較というところを通して、表記に関わることがらをいささか提示した。もとよりこの一つのケースをもってすべてを推し量れるはずもなく、今後ともこのような言語の具体相についての記述に努めたいと思う。

註

- 一 本稿では「刊本」に対する存在として「写本」を位置づけていない。どのような場合においても、その文献における自筆本の存在は理論的に設定できようが、自筆本にあらざるものはすべて(広義の)「写本」とここでは考える。冷泉家時雨亭叢書巻七『平安中世私撰集』(一九九三年八月 朝日新聞社刊)に拠る。また宮内庁書陵部蔵本(函号五〇一・二七五)は国文学研究資料館蔵の同本のマイクロフィルムから焼き付けた紙焼写真に拠る。所謂影印本と紙焼写真との比較という方法に限界があることは言うまでもないが、こうした別々の文庫に蔵されている貴重な書籍を直接並べることが適わないこともまた自明のこととがらであり、限界を知りつつ、こうした方法が本稿の論旨を損なうものではないと判断する。またこの書陵部蔵本を底本として過去に少なくとも三度翻刻が行われている。『古典論叢』第二十四号(昭和二十六年九月・十一月・昭和二十七年一月)(以下翻刻一) 図書寮叢刊『資賢集 遺塵和歌集』(昭和五十二年三月)(翻刻二)『新編国歌大観』第六卷(角川書店刊 昭和六十三年四月)(翻刻三) 翻刻一は仮名「は」に関して「へ」「ハ」を使い分けるが、「へ」「ハ」を「へ」とした箇所が若干存する。(十三オ四・十四オ七・十六オ七・二十三オ八) 八十九番歌、百三十一番歌、百九十八番歌の詞書きにみえる「御直廬」を「御直邊」とする。百六十番歌の詞書き「題恋を」は「題恋を」、百七十一番歌詞書き中の「在忍恋」は「互忍恋」、百九十六番歌詞書き中の「なかき」は「なかゝき」、二百五十六番歌作者「高階宗成朝臣」脱、二百六十五番歌詞書き中「阿弥陀佛真幽不遠」は「阿弥陀佛去此不遠」、二百六十七番歌詞書き中「観心如月輪若在輕霧中」は「観心如月輪若在輕霧中」、二百七十四番長歌七十八ウ一の「世にたゝさりし」
- 二

は「世にたえさりし」、八十二才四「関もとさかを」は「関もとさかう」ではなかるうか。翻刻二はきわめて精確なものである。しかし一三五番歌「しほみてハみきハうかるゝとも千鳥／あとなき浪にねをや鳴らん」(四十二才)の傍線「み」は字形としては「見」であるが、ここは「万葉集」にも少なからず(一一六九・一三九八・二七四三・三七二八等)みえ、また『拾遺和歌集』(九六七)、『千載和歌集』(一〇四五)など勅撰集にもみえる「しほ満てば」なる表現と解すべきと思われ、此箇所を「見」のまま翻字するのは疑問。(翻刻一も「見」)また二七四番長歌中にみえる「いま橋おほやたかせ山 こゆれハみゆる／ふしのねハ」(八〇才三〇四)の条りは、歌枕として知られる「高瀬山」(高師山)を詠み込んだと考えられ、字母「勢」を残して「たか勢山」とする処置が疑問。翻刻三は所謂「校訂本文」故、原本のかなづかい、漢字表記仮名表記の別、送りがな等をも変更しさらに濁点も施すので、そうしたことがらは措き、二七四番長歌中「株せかば」(七十九ウ)とあるのは誤植であろうか。本稿を成すにあたって一旦自らすべて翻字を行い、かつそれをテキストファイルのかたちでパーソナルコンピュータに入力した。後者は同字や同字連続の抽出を正確に行い、判読に資するため、加えて仮名文字遣の分析等に備えるのであるが、もっぱらその過程で冷泉家本、書陵部蔵本に慣れ親しむことを心がけた為にならぬ。また先行する翻刻との対照を繰り返し行い、その瑕瑾をあげつらうようなかたちとはなつたが、翻刻も書写の一つの形態であることは言うまでもなく、すべてあるテキストが判読され、書写される過程でいかなることが起こりうるのか、という本稿の主題に関わる問題を鮮明にするためであったことを述べておく。事実各々の翻刻との対照によって浮かび上がったことがらは少なくない。

三 藤本孝一「御所本歌書と冷泉家御文庫」(一九九四年七月二日「しくれてい」第四十九号)に『統史愚抄』貞享二年四月十五日の条に次の記事があることが指摘されている。「此日 召左中将為綱朝臣家文書三百二十余卷「行成卿俊成卿定家卿／為相卿寂蓮西行等法師書 自明日仰公卿殿上人等可被写者」さらにこの記事の典拠となつた『其量卿記』の同日の条を「一 従冷泉家文庫書籍三百廿冊余「定家卿為相卿俊成卿寂蓮西行等筆也」為書写被召自明日諸家中可被解由也」と示す。両書の表現は微妙に異なるが、『遺塵和

歌集」もこの時期にいずれかの「公卿殿上人」によって書写されたものと思われる。

四 冷泉家本「正安二年の四月にまでのこうちとのにて／御まりの侍しをしのひてのそき侍／けるに」(七十三ウ)の「き」は字形のみからみればむしろ「さ」と判断され得るが、此箇所書陵部蔵本は明確な「き」で写す。したがって書陵部蔵本の書き手は臨摸をしているのであるが、字形のみを写しているのではないことは明らかである。

五 本稿では、個々の異体仮名は、その字形に近似するものが現行の仮名の中に存する場合はそれを、ない場合にはその仮名字形の字母を「へ」に入れて示し、そうした個々の異体仮名の所属する仮名は「一」に入れて示す。仮名のレベルに終始する考察、分析においては所謂「変体仮名」は「字形」であるうが、本稿のごとく異体仮名レベルにおける用字法まで含めて記述する場合には、まさしくそれは「異(字)体」ということになる。

六 定家筆本「土左日記」が巻頭に近い位置で小さな誤謬を頻出させているのは「定家が未だ読みにくい貫之の書風に慣れなかつたからであらう」(池田亀鑑II一三頁)と指摘されており、臨摸に関しても同様のことがいえよう。もっとも清水義秋(一九七〇)は、池田亀鑑のこうした判断に疑問を表明し、

「定家の注釈意識による改竄」と考える。定家筆本の巻頭に関する判断は措くとしても、書写に際して巻頭でいろいろな意味において「調子」がでにくく、安定性を欠くことは稿者の乏しい書写経験に照らしても十分に首肯し得ることがらである。

七 本稿での「仮名文字遣」は安田章(一九六七・一九七一・一九七三・一九七六・一九九二)に従っている。

八 仮名「な」に関しては、漢字「奈」を字母とする三字体「な」(奈a)「奈b」に「那」を加えた四字体を区別するものが細かな区別を施したものと見えよう。ただし池田亀鑑は「那」を二字体に分ける。(池田亀鑑II二七八頁)二七九頁 土左日記諸本平仮名字体統計表 植喜代子は「同じ字母であつてもくずし方の程度が明らかに異なるものは別種の変体仮名とみなした」と述べ、この「奈」を字母とする仮名「三種を例として挙げる。ただし、用法差ということになれば「那」が「行末に多く、かつ「語尾・文節末に多用される」と述べられるにとどまり、「な」(奈a)「奈b」については積

極的にふれていない。菅原範夫は「虎明本」において〈な〉〈奈a〉〈那〉、「わらんべ草」において〈な〉〈奈a〉〈奈b〉〈那〉が使用されていることを示し、「虎明本」では〈な〉が〈全体的に用いられるが語頭の用法が多い。助動詞「なり」はこの仮名が多〉く、〈奈b〉が〈全体的に用いられるが語頭と語中尾とはあまり差がな〉く、〈那〉は〈語中語尾の用法しか持たない〉と述べたうえで〈それほど明確な用法差をもたないものもある〉とする例として扱い、「わらんべ草」では〈な〉が〈全体〉、〈奈b〉が〈語頭〉、〈那〉は〈語中語尾〉とする。つまり「虎明本」では〈な〉〈奈a〉〈奈b〉間に幾分の傾向がみられ、「わらんべ草」においては〈奈a〉に積極的な傾向がみられないことになる。矢野華はやはり四字体を区別したうえで〈な〉が〈語頭にのみ用いられる〉とするが、他の字体間に用法の差は指摘しない。各々の資料の時代や拠ってきた背景などが大きく異なることを承知しつつ、あえてこれらの記述が示すところを「和歌大綱」風にまとめれば、「上にかゝぬ〈那〉」、「上下わかぬ〈な〉」（ただし「上にかゝ」傾向をもつ場合があるか）ということになるか。念のために「和歌大綱」での實際を記せば、「下にかゝぬ〈な〉」、「上下わかぬ〈那〉（奈a）」であり、諸論考での報告と必ずしも添うものではない。それはそれとして、つまりこの仮名「な」に關しての仮名文字遣では、〈奈〉〈那〉の二字体でことが足りそうな漢とした予想が可能である。事実伊坂淳一では〈な〉と〈那〉とを区別したうえで後者を「非語句頭主用仮名」と位置付けているし、木越治はやはり〈な〉〈那〉を区別し、後者を「極端に語中語尾例の多い字母」とする。

本歌集の仮名序にみえる「正／安ふたつのしう月なかはのころ」を成立の目安とすれば、貞応二（一二三三）年の『鎌倉紀行（海道記）』、仁治三（一二四二）年の『東関紀行』また弘安二（一二七九）年の『十六夜日記』などは道程は必ずしも全同ではないが鎌倉への紀行という共通主題を有した先行文学作品ということになる。当該長歌にみられる八十五前後の歌枕・地名の中「海道記」に四十四、「東関紀行」に三十八、「十六夜日記」に二十九がみえており、重複を除くとこれら三書で合計六十二箇所が当該長歌に詠み込まれた地名と一致することになる。また当該長歌と早歌（そうか）の三曲連作「海道」との類似性が指摘されている。（外村久江「早歌の研究」昭和四十年至文堂刊、外村南都子「早歌の創造と展開」昭和六十二年明治書院刊）「海

道」と当該長歌の地名の一致は四十六箇所を数える。また今そうしたことに立ち入るべきものでもないが、岩波書店刊日本古典文学大系『中世近世歌謡集』においても、前引外村南都子論考においても、「凍りやすらむ醒めが井も 檜の葉柏はらはらと降るや霰の音立て、 関の藤河波越せど」の箇所「醒めが井」と「関の藤河」のみを地名とするが、この辺りを詠み込んだ当該長歌をみると「うきよの夢を／さめか井も みさゝきちかきしは原ものふいます／ふはのせき」とあり、地名の点綴からみて「海道」にも「柏はら」（『東関紀行』に「柏原と云所を立て、美濃国せき山にもかかりぬ」とある）を認めるべきではないか。早歌「海道」の地名列挙について〈その配列はあくまでも實際に道を歩く場合に即して行われてい〉て、〈實地に即した表現がとられている〉（外村南都子前掲書 二七五頁）ことが指摘されているが、当該長歌の場合も、「永仁のころあつまへまかりけるか／とたひかりになりぬる」（六〇才）という高階宗成が自らの経験をかかなりな程度ふまえたとき、詠み込まれた地名は所謂歌枕にとどまらない。室町時代の東海道の宿駅を知る資料とされる『実曉記』（一九六七年吉川弘文館刊）新城常三「鎌倉時代の交通」附載の「東海道宿駅一覽」による。に挙げられる六十余の宿駅中、四十三が当該長歌にみえる。これら宿駅には、例えば「きせかは（黄瀬川）」のごとく「今日者依為齋日無御符 終日御酒宴也 手越黄瀬川已下近遍遊女令群参」（『吾妻鏡』建久四年五月十五日）と「宿（しゅく）」としての繁盛は古くから伝えられるものの、和歌文学との結びつきが乏しい地名が少なからず含まれている。

「かやつ（萱津）」は古くは承和二（八三五）年の太政官符「應造浮橋布施屋并置渡船事」によって渡船の加増を命じられた記事中に「尾張國草津（かやつ）の渡」（『類從三代格』卷十六）とみえており、庄内川が東海道を切断する箇所ので渡場であり、中世期に入っては新（美濃路 旧（伊勢路）東海道の合流地点でもあり、まさしく交通の要所に位置する宿駅であったが、和歌に詠み込まれることは必ずしも多くなかったと思われる。宗碩作とされる『藻塩草』では卷第三「地儀」中の「原」に「萱津」がみられ「おはり傀儡」とあり「あつさひのかやつのはらの朝露におきわかるらん袖はものかは」と『六百番歌合』とは初句のかたちが異なる和歌をひく。また宗麟作とされる『名所千句』には「尾張」として「行末もしらすたひねの床の嶋しける萱津

の原の下みち」(第四 六十七〜八)とみえる。『東関紀行』に「わたふ津」、『十六夜日記』に「わたうと」とみえる「わたうつ」は管見では和歌に詠み込まれた例を見ない。この「渡津」は渡りの名としては歌枕である「志賀須香渡」にあたるかとされておき、和歌にはこのかたちで詠み込まれている。

『海道記』では本歌集で「濱名につくく／はしもとは」とみえる「はしもと」を「橋本ヤアカヌ渡トキニシモ猶過カネツ松ノムラタチ」と詠む。『東関紀行』にも「橋本といふ所に行つきぬれば、聞渡りしかひ有て、景気いと心すごし。南には海潮あり、漁舟波にうかぶ。北には湖水あり、人家岸につらなれり。其間に洲崎遠く指出て、松きびしく生ひつゞき、嵐しきりにむせぶ。松のひゞき、波の音、いづれも聞きわきがたし。行人心をいたましめ、とまるたぐひ、夢を覚さずといふ事なし。湖に渡せる橋を浜名となづく。古き名所也。」とみえ、また『夫木和歌抄』にも「浜名川みなとはるかに見たせは松原めくるあまのつり舟」都にて聞渡しにかはらぬははまなの橋の松のむらたち」とみえる。

書院部蔵本は冷泉家本の「かやつ」を「かやへ」とし、「わたうつ」を「わたうへ」とする。これは「つ」「へ」の字体の近似によることは言うまでもないが、やはり地名であることがそれにさらに働きかけていると見るべきであろう。『土左日記』において、かの青谿書屋本、宗綱本系統の三本(日本大学蔵本、陽明文庫本、書院部蔵本)が揃って「いしつ(石津)」を「いしへ」とすることを想起させる。

翻刻一・二は此箇所書院部蔵本の判断通りに「かやへ」とする。ただし(冷泉家本「わたうつ」↓「わたうへ」は「わたかへ」とする。(翻刻一・三は「わだうへ」また「たる井の水は／かひあらし あをの青はか いたつらに いたつれのより／あれぬらん」の「あをの」は美濃青墓に程近い地名であるが、これを翻刻一・二は「あとの」とする。

この「わたうつ」は「延喜式」兵部省「諸國驛傳馬」の条下に「参河國驛馬[鳥捕(ととり) 山網渡津(わたつ) 各十疋]とみえ、また『扶桑略記』にも「寶猷郡渡津郷住人壬生真世所領牝牛」(治暦三年八月十六日)とあり、『吾妻鏡』にも「晝渡津夜橋本」(建長四年三月廿四日)とみえ、古くは「渡津」と表記したものと思われる。〈やや広い円みのある〉形の〈入江〉(鏡味完一・鏡味明克『地名の語源』一九七七年角川書店刊)をあらわす「ワダ」

十五

十「舟着場」 「ツ」または「渡(わたり・る)」十「津」から成る地名か。後者の解釈は意味の重複をみるが、「崎」と「鼻」というほぼ同義の語が組み合わされた「崎鼻」「鼻崎」という海岸部地名も存在するところから判断するに、意味の重複は必ずしも問題にする必要はないと思われる。「度」と「わたる」との結びつきは観智院本『類聚名義抄』にもみえ、渡り度は訓を媒介にした通用関係とみることで『和名類聚抄』の表記は解しうる。註八に引いた「わたふ津」「わたうと」なる表記から中世期にはワトフツまたはワトードと長音化していたと考えられる。あるいは「和名類聚抄」の表記を考え併せれば「中世的撥音(追野虔徳 一九八七)と考えるべきか。現在は「渡通津(わつづ)」であるが、この漢字表記が中世期の発音に由来するものと考えられよう。

少しく例を加える。延文四(一三五九)年頃成立したとされる頼阿の家集『草庵和歌集』を「寛文四年甲辰八月吉日／二條通／武村三良兵衛刊行」との刊記をもつ架蔵版本によって検すると「よしさらはくれたにハてね花さそふ風のつらさもみえぬハかりに」(第一冊二一・オ・二〇)「たのめたゝてらして捨ぬ光こそ今も日吉とあらはれにけり」(同四十一・ウ・一四〇四)「人ハみな遠さかり行老らくの身にそふものハなみたなりけり」(第四冊一七・オ・一二五四)という、こそなし已然形、こそ終止形が見出される。(歌番号は『私家集大成』中世Ⅲに従う)これらについて二〇一番歌では「ぬ」との字形類似、一二五四番歌では一二五三番歌「七そちのけふまでのこる我身こそ定なき世のあまりなりけれ」との一首末表現の類似などを言えば言えよう。そうした、いわば「規範」に就いた発言によってこれらの存在にさほど気を留めないこともまた一つの立場ではある。『私家集大成』中世Ⅲが底本とする書院部本(五一・一・一一)(桂宮本)では二〇一番歌は「はてぬ」、一四〇四番歌は「あらはれにけれ」、一二五四番歌は「なみたなりけり」で、いわば「正則」のかたちをとる。また弘和元(一三八一)年十二月三日奉覧の準勅撰和歌集である『新華和歌集』を「嘉永庚戌霜月／伊勢松浦弘謹跋」と刊記のある架蔵版本によって検すると、「逢ことハさて山川のあさみこそ袖のみぬれてうき世なりけり」(三巻百三二・丁・ウ・一〇〇二)「呉竹のうきふし／の積しそ世をそむくへき始也けり」(四巻上十七・オ・二二八二)「四の緒のしらへにそへし松風ハ聞しにもあらぬねにや有けり」(同上十八・ウ・一二

九二「よしやそのおり」この思出も忘れね今ハかゝるうき身に（同上廿ウ・一二九二）と、こそ終止形、ぞ終止形、や終止形、こそなし已然形が見出される。これも江戸中期初めごろの写と思われる二冊本（『新編国歌大観』第一巻勅撰集編解題八三三頁）である国立公文書館内閣文庫蔵本を底本とした『新編国歌大観』によれば一三〇九番歌は異同がないがそれ以外の歌は「正則」のかたちをみせるのである。こうしたことがらを「正誤」という二つの極によって判断することははや意味をなさないのであろう。仮に「正則」のかたちをもとにして述べれば、正則に対するに「非正則」のかたちが生まれ、それがあつた場合には何人かによって正則にひきもどされ、またひきもどされることがなくそのかたちが跡をとどめるということの中で前引版本のかたちが残されたことは言うまでもなく、そうした言語事象を具体的に、しかも韻文という言語であることを充分にふまえたうえで評価する必要がある。何故和歌において、あるいは連歌においてこうしたかたちが見られるのか、ということをも韻文が求めている表現形式と日本語の文法的または構文的なありかたとの関わりにおいて考えるべきではないだろうか。

附記 成稿にあたって上野智子氏には地名の解釈に関して、福島尚氏には中世の交通に関する資料を御教示いただいた。兼築信行氏には和歌関係の論文についての御教示を得た。また関連論文の入手にあたって高知大学附属図書館の参考係・関覧係の方々の手を煩わしたことを併せ記して、感謝申し上げます。

参考文献

- 池田 亀鑑 一九四一 古典の批判的処置に関する研究（岩波書店刊）
 伊坂 淳一 一九八八 藤原俊成の用字法・試論——自筆本『廣田社歌合』における 機能的用字法——（Ⅱ）『学苑』五七八号）
 植 喜代子 一九七九 藤原定家の変体仮名の用法について（『国文学』八二）
 木越 治 一九八九 上田秋成自筆本春雨物語における仮名字母の用法について（『金沢大学教養部論集 人文科学篇』二六二—二六六）
 小林 芳規 一九六七 踊字の沿革統制（『広島大学文学部紀要』日本・東洋第二七巻第一号）

今野 真二

- 一九九〇 大山祇神社連歌における係結び——「ぞ」「こそ」を中心として——（『松蔭女子短期大学紀要』六号）
 一九九四a 「誹諧」連歌のかなづかい——かなづかいにおける「正風」と「誹諧」と——（『早稲田大学日本語研究』第二号）

清水 義秋 一九九四b 中世の仮名文字遺攷——荒木田守武独吟千句を資料として——（『松蔭女子短期大学紀要』第十号）

菅原 範夫 一九八〇 大蔵流狂言資料に見られる平仮名用字法の諸相（『高知大学 学術研究報告』二十八）

迫野 虔徳 一九八七 中世的撥音（『国語国文』五十六巻七号）

安田 章 一九六七 仮名資料序（『論究日本文学』二十九号）
 一九七一 仮名文字遺序（『国語国文』四十巻二号）
 一九七三 吉利支丹仮字遺（『国語国文』四十二巻九号）
 一九七六 仮名資料としての虎明本（臨川書店刊『大蔵家傳之書古本 能狂言』月報）

矢野 準 一九八〇 コソの拘束力（『国語国文』四十九巻一号）
 一九八四 已然形終止（『国語国文』五十三巻五号）
 一九九二 濁る仮名（『国語学』一七〇集）
 一九九四 平仮名文透視（『国語国文』六十三巻九号）
 一九八〇 大田南畝の文字生活——『向丘閑話』のかなの用字法を中心に——（『近代語研究』第六集）

平成七（一九九五）年九月十一日受理
 平成七（一九九五）年十二月二十五日発行

